

哲学・倫理学教室における研究

今井 道夫

札幌医科大学医学部哲学・倫理学教室

Introduction of Current Research Activities in the Division of Philosophy and Ethics

Michio IMAI

Division of Philosophy and Ethics, Sapporo Medical University School of Medicine

ABSTRACT

Our main field of research is philosophy of medicine, and it is studied especially by way of the intellectual history of medicine. We have studied the thought of Ernst Schweninger, who insisted that medicine was a form of art. But our most important theme here is the scientific philosophy of Ernst Mach. He was a physicist, but from his younger days he committed himself to the study on medicine (physiology of sensory perception). He developed revolutionary ideas of physics and scientific philosophy, which had influences upon great physicists like Albert Einstein. One of the origins of Mach's new physical ideas is, according to our interpretation, his study on the physiology of sensory perception, especially that of rotary motion. Our second field of research is bioethics. Our interest here was how we could introduce this subject into medical education. For this purpose we made efforts to edit textbooks on bioethics. Now we have a plan to reconstruct bioethics in relation to environmental ethics. Our third field of research is medical education. In recent years the American system of medical education has come to be more accepted in Japan. It is meaningful however to also consult European systems. We are now investigating the German system of medical education.

(Accepted October 31, 2005)

Key words: Philosophy of Medicine, Bioethics, Medical education, Mach, Freud

はじめに

哲学・倫理学教室は教養教育科目に属している。この部門の各教室は、戦後の新制大学において、旧制高校を引き継ぐような内容をもつ教養課程（医学系では進学課程という名称も用いられた）担当の教室であった。教養課程ではその後の専門課程にはとらわれない、学問の全般にわたる教育をすることを旨とした。とはいえ、その後の専門を意識した、専門基礎教育もなされていた。年の経つにつれて教養科目（一般教育科目）への関心が衰え、平成3年（1991年）の文部省の大学設置基準大綱化はそれに拍車をかけることになった。現在なお教養科目は残っているものの、その期間は当初の2年近くが1年ほどに短縮された。さらにその期間にあっても、教養科目というよりは専門基礎の科目がかなり優勢になっているのが現状であり、札幌医科大学もその例にもれない。

札幌医科大学は2つの学部を擁しているので、両学部の教養系各教室を教育センター化し、現在も続いている教養科目を担当し、かつまた大学入試全般を担当する道もある。

他方で、一貫教育を謳いつつ従来の教養担当教室を専門課程に取り込んでいく大学も多く、本学も大筋ではそうした方向をとってきたといえる。哲学・倫理学教室にあっては、医学部において生命倫理（医療倫理）教育の重要性が増し、さらに倫理委員会等の充実の要請が高まってきたことから、医学とのつながりを強めることになった。教育上も医学専門科目を一部担当しており、大学院についても本年より地域医療人間総合医学専攻人間総合医療学領域医療人間学をあらたに立ち上げ、受け持つことになった。

こうした状況にある哲学・倫理学教室における研究の状況を、医学との接点を踏まえつつ以下に紹介する。

1 医学哲学

1・1 医学哲学の展望

哲学・倫理学と医学の接点においては、この間、生命倫理学が注目されてきている。本教室でも次節で述べるようにこの研究に力を入れているとはいえ、第一には医学哲学を掲げている。日本における医学哲学の先駆者のひとり澤瀉久敬によると、医学哲学（澤瀉はこれを医学概論とも呼

ぶ)とは「医学とは何であるかを明らかにする学問」である。医学の原理や概念を明らかにする学問だと言い換えてもよいと思う。医学はひとりの病める患者にむきあうのが原点であるにしても、その役割として予防といったものもある。また医学はサイエンスかと問うたり、あるいは医学はアートであると説くとき、医学哲学的根拠づけが求められる。ヒポクラテス以来、医学哲学的考察がなされてきた。現代医学を考える際には、現代の科学的医学が形成される19世紀後半以降を押えておくことが大切である。ベルナール(Claude Bernard)の『実験医学序説』(1865年)やフロイト(Sigmund Freud)の諸著作は、現代の医学哲学にとって古典的な文献である。20世紀には意識的に医学哲学に取り組む人々も現われ、ヴァイツゼッカー(Viktor von Weizsäcker)、カンギレム(Georges Canguilhem)といった人たちがいる。ヴァイツゼッカーのように医師・医学研究者の場合には臨床現場の問題や医学研究の実際がじかに入ってくるのに対し、カンギレムのような哲学畑の研究者の場合には医学思想史を基盤とすることが多い。本教室でも医学の歴史的理解、あるいは医学思想史を基盤としている。これまでベルナール、フロイトといった著名な医学者を取り上げたほか、アートとしての医学を唱えたシュヴェーニンガー(Ernst Schweninger)を検討した^{1, 2)}。また医学にかかわる問題を思想史・文化史のなかで考える試みもしている³⁾。

1・2 エルンスト・マッハ研究—マッハの感覚生理学

哲学史と物理学史にその名前が登場する人としてマッハ(Ernst Mach)(1838 - 1916)がいる。人名辞典風にいえば次のような人である。オーストリアの実験物理学者で、衝撃波の研究がきっかけとなって速度の単位「マッハ数」にその名を残している。その哲学的・認識論的立場は一元論ないしは現象主義と特徴づけられ、19世紀末から20世紀初頭にかけて影響を与えた。哲学界はもちろんのこと、

アインシュタイン(Albert Einstein)ら科学者の共感をよんだり、逆にロシアの革命家レーニン(Vladimir Il'ich Lenin)の反発を引き起こしたりというように、その影響は多彩であった。詳しい人名辞典では以上に加え、内耳三半規管の機能の解明(マッハ・ブローイアー説)という業績もあげられる。このマッハについて、断続的ながら長期にわたって研究を続け、我が国で初めてのまとまった研究書『思想史のなかのエルンスト・マッハ—科学と哲学のあいだ—』を上梓した⁴⁾。これは医学哲学の研究書とはいえないものの、医学哲学と接点をもつ。マッハは物理学専攻である。そして物理学史や科学哲学にかかわる著書を多く出している。60歳近くまでは一貫して実験物理学者であった。そのうえでしかし、あまり注目されてこなかったとはいえ、早い時期から医学との接点を持っていた。それはマッハが博士号取得後の20代半ばのウィーン大学私講師時代、依頼されて医学生のための物理学の講義を担当したことがきっかけとなっている。この講義は『医学生のための物理学要綱』(1863年)にまとめられた。以来、医学的なテーマに、分野でいえば感覚生理学などにたえず関心を持ち続けた。のちにグラーツ大学を経て1867年にプラハ大学教授になって赴任するとき、誰よりも当地の医学教授(生理学者)ブルキニェ(Jan Evangelista Purkyně)に面会するのを楽しみにしたという逸話がある。

マッハは科学史上では、なにはさておきアインシュタインの相対性理論の思想的先駆として有名である。これについてはアインシュタイン自身がそう明言している。とはいえ、その先駆性を重視する科学史家と重視しない科学史家に分かれる。ただ、マッハが独特の科学思想を持っていたことは誰もが認めるところであり、そのゆえにこそ、プランク(Max Planck)らの反発を買うことにもなった。マッハの科学思想のうち、アインシュタインとの関係でいえば、その時間・空間論、機械的力学観批判などが重要となる。私たちのマッハ解釈のポイントの1つは、そうした革新的思想への踏み台になったのは、彼の感覚生理学的研究だと見るところにある。そしてマッハの著作のうちでは『仕事保存の原理の歴史と根源』(1872年)、『力学史』(1883年)といった物理学系のものもさることながら、『運動感覚論綱要』(1875年)、『感覚の分析』(1886年)を重視することになる。特に『運動感覚論綱要』であり、この著作の読解をつとに試みている⁵⁾。この著作は最近(2001年)になって解説付き英訳版も出た。ここでいう運動感覚とは、運動する物体の感覚・知覚ではなく、みずから(の身体)が運動していることの感覚・知覚である。これに内耳三半規管が関与していることが1873, 74年頃、マッハ、ウィーンの医師ブローイアー(Josef Breuer)、エジンバラの化学者クラム・ブラウン(Alexander Crum Brown)によってそれぞれ独立に発見された。この運動感覚で特に問題になるのは回転運動感覚である。そしてこれは、マッハの著作でいえば『感覚の分析』でふれられているように、眼振とも連

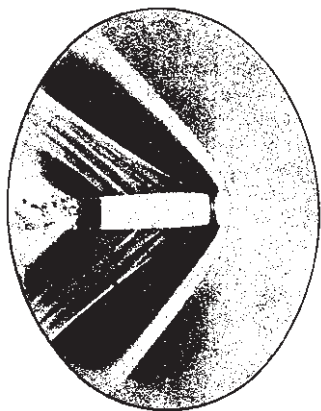


図1 マッハによる衝撃波の写真撮影(『通俗科学講義』所載)

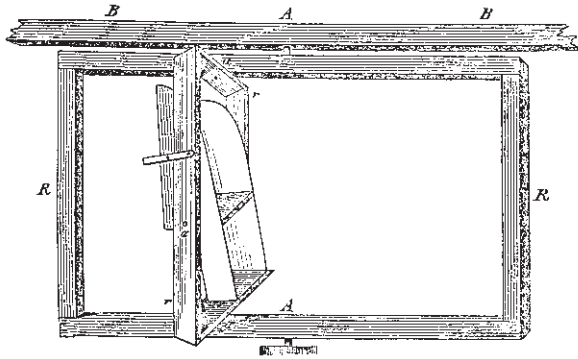


図2 マッハの考案した回転運動感覚惹起装置（『運動感覚論綱要』所載）

動している。こうしたなかで形成された観方が空間・時間、運動にかかわる彼の物理学的観方の変革に大きく寄与したと考えられる⁶⁾。

『思想史のなかのエルンスト・マッハ』で、医学と接点を持つもうひとつの論点は、フロイトとの関係にかかわる。夢の解釈の問題、自我の位置を機軸に据えて、両者のどちらからかといえばネガティブな関係を掘り下げてみた⁷⁾。思想史・文化史の領域では19世紀末から20世紀初頭にかけてのいわゆる世紀転換期のウィーンをとりまく思想・文化状況は、現代を規定する重要な要素として関心を集めてきており、当教室でもそうした論点に取り組んでいる⁸⁾。それを代表するこの2人との関係は注目されながらも、今ひとつはっきりしていなかった。それを明らかにした。

以上の研究がどのように医学哲学にかかわってくるか。マッハの科学思想の根源は物理学と医学（生理学）の接点に求められるため、物理学（あるいは自然科学一般）と医学の歴史的相関を考える手がかりになる。またマッハの科学思想は、ヒトの感覚・知覚を当時の唯物論的理解から距離をとりつつ独自に把握しようとした試みの成果でもある。21世紀の今日、脳科学の展開が著しいなかで、マッハの視点の延長にあらたな理論的思索を期待しうる。そしてまた、医学にとっても哲学にとっても根本問題である心身問題に当然つながってくる。フロイトとのかかわりでいえば、なんといっても自我をめぐる議論が焦点になる。我が国の医学哲学にとって、医学史・医学思想史の蓄積の乏しさは重大である。そのため、たとえばフーコーの著作『臨床医学の誕生』（1963年）の医学哲学的含意など、我が国ではこの書が読まれても、一般の議論にはなりようがなかった。それゆえ医学史・医学思想史を踏まえた医学哲学を当教室では重視する。

2 生命倫理学

生命倫理学（bioethics）は、医療倫理学といってもさしつかえない。ただ、medical ethicsがもともと医師の倫理と

いう程度の意味で用いられてきたこと、他方で医療の問題を中心としながらも、範囲をより広くとって考えていこうとして生命倫理学ということばが選ばれ、我が国でも定着してきた。それでも、我が国では生命倫理学者（bioethicist）を自称する研究者はいまだに少ない。その研究の対象と方法がいまひとつはっきりしないからである。当教室でも研究はしているけれども、基本的には医学・医療倫理教育とのかかわりに重点を置いてきた。そのため、まず教科書編集に力を入れた。『バイオエシックス入門』⁹⁾はかなりの支持を得て版を重ね、この分野の代表的教科書として定評を得ている。さらに『生命倫理学入門』¹⁰⁾はよりコンパクトで統一のとれた教科書として、医療系、文科系、理科系を問わず用いられている。さらにはターミナルケア（緩和ケア）について考察してきた^{11), 12)}。

生命倫理学はアメリカ合衆国で成立した学問といえる。ヨーロッパでも医療の倫理問題が厳しく問われているので、生命倫理学は広まっている。しかし、それがアメリカ的傾向を帯びているところから、ドイツでは生命倫理学（Bioethik）の名称を避け、医療倫理学（medizinische Ethik）でとおすすめ研究者もいた。それが最近、Bioethik（bioethics）ということばの造語者ポッター（Van Rensselaer Potter）の用法に立ち返り、Bioethikを環境問題も含めたかたちで再編する動きが出てきている（その趣旨を汲んで、Bioethikに生命環境倫理学という訳語をあてる人も出てきている）。当教室としてはこれまで、アメリカ型の生命倫理学から多少、距離をとってきたため、教育などとの関連での研究にとどめてきた。今後、こうした動向を踏まえて、理論構築をめざした研究を始めたいと考えている¹³⁾。

3 医学教育学

当教室では、生命倫理学について教育面を重視してきた。それを突きつめていくと、医学教育全体に眼をむけざるをえない¹⁴⁾。当教室としては、この医学教育をも守備範囲としたいと考えている。医学部にあっては医学教育を担当し、そのための基礎的研究もするしっかりした部門が必要だと思う。本学ではそれが確立していないので、とりあえず確立されるまで、その仕事を一部でも担いたいと思う。手始めとして、ドイツの医学教育の調査・研究を始めている。現在、我が国ではアメリカ型の医学教育導入に熱心である。しかし、アメリカの医学部は基本的に4年制大学の卒業生（学士）を受け入れる、日本でいうなら大学院レベルのメディカル・スクールである。つまり、入学時においてすでに教養教育・人間教育がある程度済んでいる学生を受け入れている。それゆえ、私たちが医学部で教養教育・人間教育をどう構築するかを考える際のモデルになりにくい。そして実際、モデル・コア・カリキュラムもこの点について確たる方針を示していない。その点、日本と同じく高校卒業生を受け入れ、6年間の医学教育をおこなっているドイツなどの例

は、モデルにはならなくとも十分、参照すべきである。このような観点からドイツの医学教育について調査・研究を始めており、さらにはイギリスやフランスにも対象を広げていきたいと考えている。

おわりに

私たちの研究としてみたところで当教室の教員は1人であり、増員の見込みもない。けれども、なんとか医学哲学、生命倫理学、医学教育学の分野で、研究・教育に努めてきた。北大医学部や旭川医科大学出身者で現在、この領域の第一線で活躍している人たちがいる。本学出身者では残念ながらいないようである。将来この分野に進出する人が本学からも出て、当教室のささやかな努力を引き継いでくれることを願っている。

参考文献

- 1 今井道夫. 医師の仕事—シュヴェーニンの『医師』について— (1). 札幌医科大学医学部人文自然科学紀要 1997, 38: 11-16.
- 2 今井道夫. 医師の仕事—シュヴェーニンの『医師』について— (2). 札幌医科大学医学部人文自然科学紀要 1998, 39: 9-13.
- 3 今井道夫. 症例としての鏡像書字とレオナルド・ダ・ヴィンチの場合. 札幌医科大学医学部人文自然科学紀要 2004, 45: 9-17.
- 4 今井道夫. 思想史のなかのエルンスト・マッハ—科学と哲学

のあいだ—. 東京, 東信堂, 2001, 全238頁.

- 5 今井道夫. マッハの思想形成の一面—『運動感覚論綱要』の読解—. 北海道大学文学部紀要 1988, 64: 55-87.
- 6 今井道夫. 思想史のなかのエルンスト・マッハ. 第6章.
- 7 今井道夫. 思想史のなかのエルンスト・マッハ. 第5章.
- 8 Imai M. Musil between Mach and Stumpf. Boston Studies in the Philosophy of Science 2001, 218: 187-209.
- 9 今井道夫, 香川知晶編. バイオエシックス入門. 東京, 東信堂. 1992, 第2版, 1995, 第3版, 2001, 全286頁.
- 10 今井道夫. 生命倫理学入門 (哲学教科書シリーズ). 東京, 産業図書. 1999, 第2版, 2005, 全199頁.
- 11 今井道夫. 哲学および倫理学から見たターミナルケア. 形浦昭克, 郷久鉦二編. より良い生と死を求めて—現代のターミナルケアのあり方—. 東京, 南山堂. 1999, 49-53.
- 12 今井道夫. ターミナルケアと死後の生. 札幌医科大学医学部人文自然科学紀要 2002, 43: 13-18.
- 13 今井道夫. 医療倫理と地域社会—生命倫理学を越えて—. 日本農村医学雑誌 2003, 51: 902-906.
- 14 今井道夫. 医学部における生命倫理教育. 教育と医学 2002, 593: 27-34.

別刷請求先:

〒060-8556 札幌市中央南1条西17丁目
札幌医科大学医学部哲学・倫理学教室 今井 道夫
TEL: 011-611-2111 (2590)
FAX: 011-563-1980
E-mail: imaim@sapmed.ac.jp